

心を動かす言葉

NHK エグゼクティブ アナウンサー 加賀美幸子 海竜社

{ 言葉力～言葉を支える背景 }

* 魅力ある話し方は息にあり～語尾がモノを言う～

「お元気ですか？」より「**お元気ですね！**」で「本当は元気でないけど、それは嬉しいなあ！」と挨拶するほうがお互いに気持ちがいい、言葉には癒す力がある。

* 言葉を乗せる「声」～**声だけは年を取らない！**生き生きと暮らしている人々の言葉ぶりと声の強さは、線の細い若者とは比較にならない程に強く、確かで、深く、熱く、優しく、初々しく、若々しく、魅力的な良い声です。

* 声には言葉が伴い、言葉には心が伴う～言葉には常に内容と心が伴い、しっかり年を取っていれば・・・とるほど声も生き生きとしてくるのは自然の事ではないだろうか。

「少数派には少数派の言葉がある」～**たまたま**のメッセージ～

* 米国の聾者劇団の美人女優フィッツ・フィーリッヒさんに「貴方達はたまたま耳が聞こえる多数派、私達はたまたま耳が聞こえない少数派、少数派の言葉も磨けば、いずれも、光ってくる」と「たまたま」のメッセージは新鮮に響き忘れられない言葉。

* 人は皆同じ、と思うと、心が柔らかくなる～他人の手を借りなければ食べることも排泄する事も出来ない重度の障害を持った、羅せいれいさんは某国立大学院で心理学を学び研究、車椅子で障害を持つ人々の為に力強い応援を続け「・・・人は誰もが様々な制約の中にあり私はたまたま障害を持つという制約の中にあるだけなのです」私達は時間・金銭・才能・生活空間・人間関係の制約の中にあり障害もたまたまの事。

「**気になる言葉**」～ゆっくりと子供を育てる気持ちで林を育てる～日本で一番高い所を走る「小海線」全長78、9km、その高原列車の車窓に広がるカラマツ林は多くの人々を引き付けてきた。地元の人々の息の長い日々、カラマツを植え続け40年以上、昭和20年山火事で焼け野原、麓の人々の息の長い日々の結果であった。間伐は美しい林にする為に必要で不良木は間引かれる。～私はその言葉にいつもドキッとするサトウハチロウの「**不良少年の詩**」パチンコなんて寂しすぎるんだよ/僕は心が弱いんだよ/弱いから強がりばかりいうんだよ/母のことばかり思われて泣けるんだよ/寂しがり屋だから嘘ついたんだよ/人を斬ったって嬉しくはないんだよ/悲しみの層を増すばかりなんだよ・・・不良という言葉には淋しさがある・・・言葉は大事に使いたい。

「**良い塩梅の言葉**」～ことば美人～ことば美人は年齢に関係なく磨けば磨く程、魅力は永遠に続く。人は何故か、気持ちの良い時、鼻唄を歌い、好きな唄を口ずさむ・・・

「**さわやかに、敬語を！**」いたします、降ります、まいります、いただきます等身につける

「**めぐる季節の喜びの言葉**」～自然に寄せる人々の心～

正月(睦月)如月、弥生・・・という呼び名は日本の暮らしの文化が鮮やかに感じられる立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨、立夏と続く「節気」は今も親しまれている等三時のおやつは？もともと食べ物の事ではなく「**八つ時**」今でいう2～4時迄の時間江戸時代も八つ時だから「ちょっと休んでお茶にしようか」と午後3時頃のおやつ。

「**あるがままに**」～ことばは言葉だけでは存在しない～高校時代英語の教科書に英国女流作家キャサリン・マンズフィールドの短編「風が吹く」は何故か忘れられなかった、卒論のテーマとして私はより引き付けられた、作者の声が聞こえる「あるがまま、読んでもらえば、それで良い・・・」と。アナウンサーの仕事では、私は何より先ず聞く事だと信じている。内容やテーマ、人の言葉を何処まで聞けるか聞き取れるか無心に効いていると、自然に何が大事か見えてくる、どうすればよいか知らせてくれる。

「**見えない、聞こえないところに思いを**」～私の言葉の旅～5年と6年を担当していただいた先生に、初めて「詩」を書く事を通して自らの表現方法を開く扉を教えられた様で、つつましくも歓喜に満ちた出会いは静かに深く潜行し、その後の自分の行く道を決定してしまう事に、詩を作る作業は私の話し言葉にも形となって現れた。

{ **仕事力**～仕事を生かすもダメにするも自分次第 }

*どんな仕事も宝に～削る事で自らを提示～仕事の種類や内容に拘らない、好き嫌いが無い自分の関わり方で宝にすればいい、楽しんで徹底、変わらず続けると伝わる。30有余年の仕事旅は「どう自分が係るか」をひたすら大切にしてきた自分の宝物。

「**一番好きな事を仕事にできなくても**」～仕事は誰かの心を動かすもの～目の前にある仕事に全身全霊で力を尽くし誰よりも厚く大きな実にしてみようと無心に積み重ねていると、誰かが必ず見ていると気づいてくれる、誰かの心を動かす。実は書くことが一番好きだった、一番を仕事にすると純粋に楽しむことは難しい、自分には書く世界があると思うとアナウンサーの仕事が上手く行かなくても何故か余裕で全て乗り切れた。

*歯車としてピカリと～マイペースと歯車としての役割～ありとあらゆる番組を担当してきたアナウンサーの仕事に付加価値をつけ乍ら、大きく作り上げていく事を我が道に。

*不遇の時こそチャンス～誰もが遠ざけるラジオのアナウンスは短い中にも腕を問われ怖い仕事でもある、命を懸ける気持ちで取り組み何気なくざらりと、要は結果次第。

「**家庭と仕事は相乗効果**」～ダメでも下手でも自分で子育て、家事、仕事の感じ方、考え方、物差しは人の数だけある。先輩の生き方にメッセージを探す～中村メイ子さんの「女優、母親、主婦どれも大事にしてきた、家事や育児を人任せにして仕事に突き進んでいたらもっと大きなことが出来たかもしれない、でもこれでよかった」と。

「**自分の北極点を**」～俳優和泉雅子、誰も特別ではない日本人女性として初めて北極点到達の快挙、そこに立って、あくまで自分との戦いで、戦いきれた事で怖いものが無くなった「何事も全て気にせず自由にのびのびと生きられるようになり、そして何より人を好きになった」と。

「**基礎の力はプロの力**」～技に人生が見える～

～ゴルフの飛距離を延ばす為、杉原輝雄さんは小柄な体で長いドライバーを駆使し、自分流の技を極め続け年齢も病も物とせず一途に体を鍛え抜いて常に一線で活躍、その事でご本人は「鍛えるというより頑張ることが出来る、その事こそ有難いんです」と又プロとして一番大事な事を伺うと「それは安定感、常に安定している事」安定感とは「基礎の力、基礎の力がしっかりしている事、咄嗟の時にピンチは抜け出せる」「基礎がある人は出来不出来が少なく安定している、それがプロというものではないか」

「**本当に夢を持ってないのだろうか**」～♪いつでも夢を～デビューしたての初々しい歌声は橋幸夫さんと吉永小百合さん、その若さが時代の空気にピッタリ合った。9人兄弟姉妹の末っ子の橋さんが、痴呆症になった母サクさんを引き取り妻の凡子さんと共に看取った、懸命に介護する父母の姿を見ていた娘奈央さん、福祉施設で身を粉にして働くプロの力に感動しこれこそ自分の道と決心し、介護福祉士として生き生き仕事。

「**グレイという熱い生き方**」～当代人気の美人版画家山本容子さんは40代後半だが、どう見ても20代か、30代前半にしか思えない程若々しく美しい。

番組でお会いするきらきら輝いて仕事道を進んでいる女性の多くが何故か決まって、グレイ系の色を身につけて、最近の番組でも山本さんはグレイのパンツスーツだった。

「**語らない部分、描かない部分がある方がいい**」～イラストレーター第一人者山藤章二さんと独特の一人芝居で人気のイッセー尾形、お二人の交流は長い「語らない、描かない部分は、見る人が補って味わう、その相乗効果で芝居も絵も大きくなる、一人芝居が何故面白いのか、それは観客が自分のイメージで補い二人芝居になるから」と山藤さん、大きく笑える人・余り意味が分からない人・観客の質次第それが面白い。

「**眠りを誘う名人芸**」～眠れぬ夜は生きているという証拠～365歩のマーチや兄弟船の作詞家星野哲郎さんは「いつも、今は亡き古今亭志ん生師匠の落語テープを聞いて寝るが、あまりに気持ちよく自然であるため、必ず眠くなり、そういう芸は滅多にない」

「**小さな旅**」の出会い＝プロとしてのけじめとゆとり～倉地辰代さんに、小さな旅でお会いし当時77歳20kgの荷物を背負い一番電車に乗り、魚の行商、戦後の21年から時化で魚もない限り休んだ事がないという。3人の子供を女手1つ行商で育て上げたお客さんにとって「どんな時も来てくれる生きのいい魚を運んでくれる」他人の事は絶対に云わない。待っていてくれる人々がいるのは何よりうれしい、やめられない幸せ。三時には家を出て誰もいない駅舎とホームを一番電車が来るまでの1時間を掃除。

～**買った時より立派に**、の腕～ピリヤード直しの名人73歳の石田勇さん「見事な直しが出来るには高校を卒業してからでは遅い、もっと早い内に、親方のいい仕事を傍らで見ながら身につけないと生涯を支える技にはなりにくい」と云う。

「**家族は旅に**」～誰もが限りなく優しい～新潟から佐渡の両津迄フェリーで二時間強更に、車で約1時間「願＝ねがい」の集落(21戸)に着く、家族を旅に出している土地の人達は皆、限りなく優しい。

68歳の鏡子さんは今も危険な岩場の海で岩のりを取り、3人の子供さんに送ると手紙が来て、嬉しいけれど母さん大変だからもう止めて、というがこれが生甲斐と。

～海に洗われ、海に鍛えられた目～一等漁師と呼ばれている山口文太郎さん 70歳は若いものを凌ぐ目と技それをしっかり支える弾力のある竿先に小さな金具をかけ引き上げるプロの腕(僅かな傷でもアワビの価値が半減する)木彫りの名人井端理さんは毎日浜に出て仕事に出られない日は木を拾い趣味でお盆や器を作る。

「**続けられることの幸せ**」～さっぱり濃密な結びつき～NHK 朝の連続テレビ小説“あぐり”の主人公、吉行あぐりさんは、作家故吉行淳之介さん、俳優吉行和子さん、詩人で作家の吉行理恵さんの母上 92歳の誕生日にお迎えした、あぐりさんは92歳で現役の美容師でかくしゃくとスッキリ美しい。最近和子さんと海外旅行、母の方があれも見たいこれもと、はるかに元気なんですよと嬉しそうな和子さん。

{ **読む力**～人生を読む 人間を読む }

「読む」は人生の宝～読むことは、自分より対象に向かっている～声で、目で、心で、人の心を読む、状況や未来を読む等生きる上での根元的な知恵があるように思える
「**千年が知らせてくれる今**」～こんなに面白い古典～ある時から嘘のように自然に楽々と読めるようになった。言葉は洗練され、豊かで響きは爽やか、心は深く、香りありその新鮮さに驚くばかり。紫式部は二人だけの恋物語、源氏物語は登場人物約450人で主要人物だけでも50人の全編ラブストーリー、若い人こそ今、楽しんでほしい本です。
「**メッセージの根源にあるもの**」～幸せのメッセージを探したい、語りたい～赤毛のアンの中に出てくるポプリに惹かれ、長い間こだわり調べていくうちに一生のテーマになったというエッセイスト熊谷明子さんはポプリの第一人者、当時の少女達の心を瞬く間に捉え、夢と希望の魔法の粉を振りかけてくれた人生はメッセージを探す旅のよう。
「**どこまで読み込めるか**」～読むことの怖さと、魅力～同じ内容でも、どう読むかで千変万化、何となく怖く・そしてなんとも魅力的な仕事、どう読むか・どう読めるか・その人間が露呈してしまう怖さ、どこまで物事の心が読めるか、そして表現できるかを問われる。
「**自分探しの“論語”**」～論語は日本では縄文時代に生まれた孔子が弟子達に伝えた詞、その一語一語が2500年経った今でも、益々生き生きと語りかけてくれる。論語を座右の書とした故渋沢栄一氏は人生でも仕事でも悩んだ時の物差しに照らし考えた。

{ **聴心力**～全てのものがメッセージを発信している }～天才も凡人も～

* 味わう楽しさ、聞き取る喜び～人間とは何か?～どう生きればいいのか?～生きる上での多くのメッセージに耳を澄ませて聞き取ってきた、それは享受の喜び宝だ。世界的に有名な横尾忠則画家の宇宙、霊、夢、インスピレーションの世界。観念を離れた魂の自由さ・・・横尾さんの芸術はエネルギーに溢れ国を超え人々を引き付ける。
* 過ぎて虚しく、足りなくてもどかしい～過ぎては押さえ、足りなければ補う P 4

耳を澄ませ、相手の様子や言葉を大事に聞き取り読み取り、過ぎては押さえ、足りなければ補う、人生のメッセージが聞こえてきて嬉しい、慌てずゆっくり歩いてゆきたい。

「**石の音が聞こえる**」～石が全てを教えてくれる～石の彫刻家浅賀正治さん、この石は？と聞いたら 75 百万年前の恐竜時代の石だと、石として未だ若いと、石の目を見つけ、そっと楔を入れると、いとも簡単に身を割って見せてくれると、石の上に乗る、身を任せ、声をかけると、石の刻み方も石の方から教えてくれるという。

「**心に届く声**」～女性狂言師和泉淳子さんの力のある声は明快で自然で重さもよく受ける心にピツパリと納まる、清々しくも堂々たる芸の声だ。日本史上初、そして美人で騒がれているが観客をぐいぐい引き付けて離さない。女性が舞台に立つことを拒み続けた6百年、しかし神髄を伝え続けた芸の道は女性の登場によって更に世界が近くに。

「**一度失くしたら、元に戻らない**」～人はいつも旅の中～意識している時もない時も小さな旅を続けている、ドラマチックではないけれど生きていくという事はこういう事かも。

～**メッセージをどう聞か**か～埼玉県大宮市近郊の農家を訪ね、朽ちかけた茅葺の屋根、崩れかけた土壁、かしいだ柱、にも拘らず堂々とした風格、その家の主は新しく建て替えたくない、家だけでなく古い農機具、石臼、田下駄、糸紡ぎ機、木の鋤等など皆見えるところに置かれている。先祖代々の証を大事にしておきたい、と主はいう。

「**生き方の鍵をききとる**」～聞けば話せる～子供達がゆとりの心でメッセージを受け止めるには子供達自身が幸せでなければならない、生まれてきて光や水、動物、植物、空や大地、雨や風、人々の言葉や笑顔、世の中に存在する全てのものや事に触れることが出来る幸せを先ず子供達に語りたい。

「**聞き上手**」と「**ゆとり**」の関係～話し下手より、聞き下手の方が恥ずかしい。聞き上手があまりいない、優しいようで難しい、心惹かれる言葉の世界を持っている人の中からは、いつも、生き方のゆとりの声が聞こえてくるような気がする。

「**聞き上手は強い生き方に繋がる**」～相手が見え、自分が見える聞き方～聞き上手こそ人に好かれる実感。魅力ある聞き上手とは心にゆとりがあつてこそ幸せの実感、存在の幸せ感その幸せ感が他人への思いやりに繋がり聞き上手が生まれる

{ **人間力** = 宝物は夫々の生き方の中に } ～努力できることが有難い～

「**心の時代**」～エッセイスト高見沢潤子さんは94歳で本当に若々しく初々しく美しい、的確で爽やかな言葉に乗って語られる内容は明晰で豊か多くのメッセージを心に刻んだ。兄である小林秀雄の有名な大作「本居宣長」について難しかったら何度でも読み返してほしい、その心を探って欲しい、と。一人の作家を論ずるにはその作品の全てを虚心に読むことが何より大事だと。故大岡昇平さんは小林氏の批評文は読者の頭ではなく胸に訴える、と。

「**頑張れる力がある有り難さ**」～中村久子さんは突発性脱疽で3歳の時両手両足を失い、以来14年間痛みは続き、秋から冬には昼夜の別なく泣き叫んでいた、 P 5

11歳の時、母は将来一人でも生きていけるように猛烈な教育を始め、手足のない子に着物を解け、針に糸を通せと命令、できなければご飯も食べさせない12歳の終わりには口を使い小刀で鉛筆を削り、字も書き、糸も通せ、反物も縫え、箸を体に縛り付け一人で食事。20歳で親元を離れ、自ら「見せ物芸人」を選び、裁縫・編み物・色紙に文字を書く芸を人前に晒し、46歳まで続けて堂々と生きた。中村さんは「ここまでやってこれ、頑張れる魂を貰っていることの幸せ、を思いたい」と。(没年72歳)

「我慢好きの我が意を得たり」～普通の家の機微を描いて～

渡る世間は鬼ばかり、おしん等の脚本家橋田寿賀子さんは70歳を過ぎても毎朝800mの水泳、料理も家事もいとわず寸断なく続く原稿依頼も書くことが楽しくて楽しくて、と～言いたいことを言えない事を代りに～40歳の時に4歳年下の岩崎嘉一さんと結婚、次々とヒットを飛ばす前の事、夫は何かにつけて自分の母親と比較、姑もよく来て嫁姑の葛藤は少なからずあり、口答えはせず、それを自分のドラマの主人公に語らせた。

「捨てて得たものの大きさ」～なぜ絵筆を折ったのか～

日本を代表する日本画家、平山郁夫さんを支え共に歩んでこられた美和子夫人の人氣も高い、夫人は画伯と同じ東京芸術大学の卒業生しかも同期、卒業制作では主席が夫人で二席が画伯だった。才能に恵まれ進めば画家の道は大きく開いた翌年に、全てを捨てて平山青年と昭和30年に結婚、平成10年放送の仕事でお二人にお目にかかった際に夫人は「一番大切なものの価値あるものを捨てなければ捨てる価値はない、つまらないどうでもいい物を捨てても何の値打ちもない、捨てたものが大きければ得るものはもっと大きいかもしれない、何かを得る為には何かを犠牲にするしかない」

「素晴らしき自由時間」～老年のダンディズム～数学者森剛(元京大名誉教授)さんにお会いした。70歳に入ったばかりで言論芸能人と称しながら大活躍、老年の今こそ何より素晴らしき自由な時期と。人生120年とし11に区切る説を唱え、20年たてば世の中は必ず変わるのだから、前の説にも固執せず常に新しい事を、と。

「美人中の美人」～他の追隨を許さない存在～

女優山本富士子さんは昭和25年初めてのミス日本一に選ばれ映画界に進み大女優 当時は未だ危険な結核に罹った丈晴さん、黄金時代の看板スターとの恋愛時代に二人を繋いだのは千通に近い手紙のやり取りそして今も折に触れメッセージカードを交換し合う、80になっても今のままでありたいと富士子さん手料理も天下一品だった。

「勿体ないが人気の秘密」～苦しさや悔しさを忘れては勿体ない～

山本陽子さんは3年 OL 経験後に昭和38年日活入り、当時は浅丘ルリ子、吉永小百合、和泉雅子、松原智恵子、芦川いづみ・・・きら星の如き女優の中で、いわゆる大部屋、その時代の事を勿体ないとばかりに自分の肥やしとしてきた。ライフワークともいえる宇野千代さん原作の「おはん」の様に耐えるのが好き、でもどこかでバツサリ。

「エネルギーの原点」～今も手で書く鉛筆党～

大河ドラマ毛利元就はじめ、朝の連続ドラマ「ひらり」では

2百字詰め原稿用紙8千枚以上も全て手書き、締め切りに遅れることがないのも自慢
その内館さんも幼稚園の頃は想像を絶する様な弱虫、いじめられ、半年で中途退園。
小学校で突然明るい元気な子になったのは先生に「字も上手いし書くのも早い、皆
内館さんに負けないように頑張ろうね」の言葉で明るい元気な子に生まれ変わった。
でも、卒業後のOL生活は何も見えず苦しみ続けた13年半、自らを叱責してシナリオ
学校で勉強し直した、会社を35歳で辞め、脚本家デビュー39歳、登場人物に「どう
せ私の人生にいい事なんか起きっこない」と云わせ乍ら「人生まんざら捨てたもの
ではない」という予感で終わらせる内館ドラマの爽やかさ。

「**引いて見る、もう一人の自分**」～初々しい落ち着き～

テニスの全仏オープン混合ダブルスで優勝した平木理化選手当時25歳小柄で可憐、
初々しいのに落ち着きの自然さ彼女はインドのプパン選手と全くの初対面で組み優勝。
プパン選手は「本当にやり易かった、彼女はいつも笑顔でいてくれた」と話す。世界
の四大大会での優勝は日本人として22年ぶりの快挙、彼女にはOLとしての顔もあり
試合や練習のない時は人より早く出社何倍も働き同僚の為お茶を入れ自然に楽しむ。
あるがままの強さで十代の初めから世界中を転戦、大会の申し込みからホテル予約
迄一人でこなし多くの人や様々な物事に揉まれて苦勞して落ち着きと自然と初々しさ。
テニスをしている時「プレーする自分ともう一人の自分が観客の様に自分を見ている、
私はいつも試合を楽しんでいる、もう一つの目があれば怖いものがないような気がする」

「**努力できることも才能の一つ**」～天才三兄弟～バイオリニスト千住真理子さん2歳3ヶ月
で習い始め、天才少女と早くからその名は知られていた。長兄の博さんは大学の進
路を決める際に日本画家になりたいと言って両親を驚愕させ、現役では無理だから30
歳まで頑張れと言う言葉に奮起3年目に独学で芸大に合格、国際的に活躍する日本
画家に。次兄の明さんはバイオリンへの思いを断ち切りピアノの練習を20歳からでは
遅すぎると言われても諦めず1日十時間以上練習、3年目に合格、専門は作曲。努力
しても駄目だったのは多分努力しきれていない、何処迄努力できるかが才能と云いたい。

「**大いなるものに身を任せて**」～人気の秘密～

瀬戸内寂聴さんの源氏物語は人々の心を捉え大ベストセラー。岩手県の古刹「天
台寺」の権僧正の寂聴さんのお説法は聞く人の心を捉え境内は人の波に埋まってし
まう程、家出、離婚、作家活動、そして名声をほしいままにし、願いの多くを手にした時
たまらなく虚しくなったという。51歳で何か大いなるものに捕らえられて出家「大いなる
ものに身を委ねているから、老いも死も怖くない、人の毀誉褒貶も気にならない今は
「全き自由の日々」と語る。源氏物語の全訳は想像を絶する様な大仕事、何年かの
準備期間の後、書き始めたのは70歳になってから書いているというより書かされている。
生かされている、何か大いなるものに身を任せる事の「全き自由」の中にいらっしやる。

(**あとがき**)

言葉には人を動かす力がある、言葉探し、メッセージ探しの旅は日々限りなく楽しい。